図書館だより

2020年
2月号

2020 年 2 月 7 日発行

今年は閏年(うるうどし)です。閏とは、暦と季節のくい違いを調整するために日数または月数を多くする年のことを言います。その閏日にあたるのが2月29日です。1日ではありますが、今年はいつもより長いのだと思うと、お得な気持ちになれるものです。その1日を有効に過ごしたいですね。立春(2/4)を過ぎ、暦の上では春の気配が始まる頃。体感的にはまだまだ寒さの真っ只中に思えますが、菜の花やクロッカスもこの頃から咲き出します。花を愛でながら暖かくなるのを待ちましょう。

図書館では、この時期恒例となるバレンタインの展示を始めました。本日行われる“バレンタインクッキング”でバレンタインの予習をする人もいるかと思いますが、手作りチョコレートを贈ろうと考えている人のヒントとなるレシピ本をたくさん用意しましたので活用してください。それと併せて今回はメッセージカード制作コーナーも設置しましたので、チョコレートに添えるカードも図書館で手作りしていってください。

＊季節の移ろいに心を寄せる＊

914.6―オ 『ひらがな暦』　おーなり 由子 ‖ 絵と文　新潮社

絵本作家、漫画として活躍するおーなり由子さんがやわらかな絵と言葉とで366日を綴っています。あっという間に日々は過ぎていってしまいますが、1日1日を丁寧に暮らしてみると、色で、音で、空気で、感じられることがたくさんあるのだと気がつく本。

『二月七日 しもばしら　自転車置き場に、じゃりんと、白いしもばしら。しもばしらが立つと、うれしくて、踏まずにはいられない』

こんな風に四季の様々な情景と自分の暮らしを重ねて、豊かな心で1年を過ごしたいものです。

＊チョコレートが食べたくなる本＊

913.6―フ 『ショコラティエ』　藤野 恵美 ‖ 著　光文社

単なるクラスメイトだった二人の少年が親友になるきっかけになったもの、それは、お菓子作りだった。製菓会社の御曹司である光博と意気投合し、お菓子作りに打ち込む日々は、父を亡くし、ぽっかりと穴が開いたようだった聖太郎の心を癒してくれた。しかし、光博の境遇を嫉妬する心が聖太郎の心に芽生え始め、一方的に距離をおいてしまう。別々の道を歩み始めた彼らは、それぞれが持つ劣等感と葛藤しながら、大人へと成長していく。二人がまた親友として再会する日は来るのだろうか。

チョコレートのおいしさが伝わってくる描写が何度も登場するので、この時期にもぴったりです。

贈る言葉に代えて

今月号が3年生に渡す最後の図書館だよりとなります。この3年間を通して、少しでもみなさんに本の楽しさを伝えられていたら嬉しいです。小さな本の中には大きな世界が広がり、物語の世界を楽しみたい、疲れた心を癒したい、新しい知識を得たいなど、みなさんの様々な想いを叶えてくれます。本はひとりで読むものですが、みんなで分かち合えるものでもあります。1冊の本をきっかけにそこから人の輪も広がります。たくさんの本に触れ、素敵な出会いを重ねていってください。

913.6―カ 『点をつなぐ』　加藤 千恵 ‖ 著　角川春樹事務所

コンビニスイーツの商品開発をしている主人公みのりは、物語の終盤にこんな言葉を口にします。

『選びつづけたいんです。苦しいけど、しんどいけど、でも選びつづけたいんです。』

この言葉に辿り着くまでのみのりの物語は決して特別で劇的なものではありません。きっと誰しもが経験しうるような日常的でありふれた物語です。そのような静かな日々の中にもたくさんの選択があって、そのひとつひとつが緩やかにつながって、物語が紡がれていくのだろうなと思います。

みのりの年齢は君たちの 10 年後、28 歳。10 年後、君たちはどんな物語を紡いでいますか？

【3年8組担任　関口先生からの贈る本】

『ぼくはイエローでホワイトで、ちょっとブルー』　フレディみかこ ‖ 著　新潮社

自分という人間と、自分とは違う人間。

これからの時代は多様性だらけで、つい自分と似た価値観や言葉、見た目で良し悪しを決めてしまいそうになるけれど、いかに相手を「人間レベル」で見て、考え、話したり行動したりするか、それがこれからの時代必要な力であると、改めてこの本は気付かせてくれました。

この本のタイトルの意味を、是非みなさんも読んで考えてみてください。

【3年2組担任　宮本先生からの贈る本】

図書館司書の「今月はこの本を読みました」

2020年本屋大賞ノミネート作品が発表されました。「全国書店員が選んだ　いちばん！売りたい本」というだけあって、毎回面白い本が選ばれています。ノミネートされたのは10冊。**『ライオンのおやつ』小川糸 // 著　913.6-オ　ポプラ社**は以前に読んで、私もひとにお勧めしたい素敵な本だと思っていました。他は**『線は、僕を描く』砥上裕將 // 著　913.6 講談社、『店長がバカすぎて』早見和真 // 著　角川春樹事務所、『夏物語』川上未映子 // 著　文藝春秋、『熱源』川越宗一 // 著　文藝春秋、『むかしむかしあるところに、死体がありました。』青柳碧人 // 著　双葉社、『ムゲンのi』知念実希人 // 著　双葉社、『medium 霊媒探偵城塚翡翠』相沢沙呼 // 著　講談社、『流浪の月』凪良ゆう // 著　東京創元社**です。大賞の結果発表は4月7日。それまでにまず**『線は、僕を描く』**を手に取りました。著者は水墨画家だけあって、読めばその奥深い世界の一端と芸術の持つ力に触れられます。これもお勧めしたい本でした。【鈴木】

⭐先生がプロデュース!!今月の展示⭐

今月の展示は… **丸山教頭先生** がプロデュースです☺

展示のテーマは…、**【冒険・探検そして異文化】**

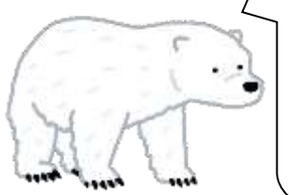
皆さんは、冒険・探検と聞いてどんなことを思いますか？多くの人が、ワクワクしたり、怖そうだなどと感じるかと思います。誰もが、未知の世界に憧れると同時に、不安を感じるのではないでしょうか？でも、人には「怖いもの見たさ」がありますよね。だからこそ、冒険・探検等に憧れを持つのではないでしょうか。私にとって、初めて触れる出来事全てが、冒険であり探検です。私はその冒険や探検も「実体験できる」、「実体験できない」の2つに分類できると思います。「実体験できる冒険・探検」は「旅」です。「実体験できない冒険・探検」は「本」を通して感じ取ることができます。冒険や探検は「異文化」に触れるチャンスであり、新たな発見と出会うチャンスです。皆さんはどの様に感じますか。私が初めて旅したインド、そこはまさに冒険であり、探検の場でした。見るもの聞くもの全てが私たちの文化と違う、異文化でした。生活も社会も・・・・。是非、若い時に実体験をして欲しいです。

私が勧める実体験できない冒険・探検本をぜひ読んでください。

◆展示本リスト◆

292-タ『未来国家ブータン』　高野 秀行 ‖ 著　メディアファクトリー
294-タ『恋するソマリア』　高野 秀行 ‖ 著　集英社
294-タ『謎の独立国家ソマリランド』　高野 秀行 ‖ 著　集英社
383-タ『謎のアジア納豆』　高野 秀行 ‖ 著　本の雑誌社
290-サ『一号線を北上せよ』　沢木 耕太郎 ‖ 著　講談社
915.6-サ『深夜特急　1～6』　沢木 耕太郎 ‖ 著　新潮社
292-カ『空白の五マイル』　角幡 唯介 ‖ 著　集英社
297-カ『極夜行』　角幡 唯介 ‖ 著　文藝春秋
297-カ『極夜行前』　角幡 唯介 ‖ 著　文藝春秋
B292-ヨ『世界一周デート』　吉田 友和／松岡 絵里 ‖ 著　幻冬舎
B292-タ『ガンジス河でバタフライ』　たかの てるこ ‖ 著　幻冬舎

この中でも、いちおしなのは…



297-カ 『極夜行』　角幡 唯介 ‖ 著　文藝春秋

極夜？聞きなれない言葉ですね。北極や南極では極夜の時、太陽が地平線の上にこないため、一日中真っ暗、もしくは薄明り。そんな状態が何日も何日も続く北極での冒険記。想像もつかない極夜を旅する作者。準備万端整えて、出発するも、極寒の地、方角もわからず、ベースキャンプに保存したはずの食料は白熊に荒らされ、万事休す。日に日に食料はなくなり、ついに相棒の「犬」を・・・・・。やっと極限状態を抜け出した作者は、オレンジ色に輝く、本物の太陽に出会う。

本で振り返る平成の30年

今回は平成22年（2010年）から時代と本を振り返っていきます。日本は6月～8月の平均気温が過去113年で最も高くなるなど、大変な猛暑の年となりました。この年のベストセラー（トーハン調べ）1位は、岩崎夏海さんの**『もし高校野球部のマネージャーがドラッカーの『マネジメント』を読んだら』**でした。また、2位に**『バンドー本でやせる！巻くだけダイエット』**、3位に**『体脂肪計タニタの社員食堂』**が入るなど、ダイエットや健康を意識する人向けの本が上位にきていました。

続いて平成23年（2011年）は、東日本大震災が起こった年です。大きな衝撃と深い悲しみに包まれました。もう少しで9年が経とうとしていますが、あの日を忘れず、復興の道を私たちも応援しましょう。この年の1位は東川篤哉さんの**『謎解きはディナーのあとで』**、10位には第2巻もランクインしました。前年3位だった**『体脂肪計タニタの社員食堂』**は2位に上がり、続編は3位と、こちらもシリーズで人気を博しました。

平成24年（2012年）は東京スカイツリーが電波塔、観光施設として開業しました。「東京スカイツリータウン」には開業から5日間でなんと140万人以上が訪れたそうです。この年は阿川佐和子さんの**『聞く力』**がベストセラー1位に輝きました。5位の**『舟を編む』**は辞書作りの現場を舞台した小説として注目を浴びました。これを読んで、辞書に興味が湧き始めた人も少なくないはず。

平成25年（2013年）は、2020年のオリンピックが東京で開催されることが決定した年。招致のプレゼンテーションで滝川クリステルさん使った「お・も・て・な・し」の一言は、流行語大賞にも選ばれるなど、多くの人の記憶に残りました。**『海賊と呼ばれた男』**（4位）や**『ロスジェネの逆襲』**（5位）など、働く男性にスポットを当てた小説が上位に入ってきているのが、この年のランキングの特徴でした。

913.6-イ 『もし高校野球のマネージャーがドラッカーの『マネジメント』を読んだら』
岩崎 夏海 ‖ 著　ダイヤモンド社

川島みなみは高校2年の夏、野球部のマネージャーになった。彼女の目標は「野球部を甲子園に連れていく」こと。弱くもないが強くもない野球部を甲子園に行くチームにするため、みなみが手にしたのは、ドラッガーの著書『マネジメント』だった。この経営学の名著をみなみは野球部に見事当てはめ、マーケティングやイノベーションに取り組みながら、チームのため全力を尽くす。女子高生と野球部と経営学という組み合わせがおもしろく、原著の『マネジメント』にも興味が湧いてくる本です。

913.6-ヒ 『謎解きはディナーのあとで』　東川 篤哉 ‖ 著　小学館

宝生麗子は国立署の刑事。その麗子の相方は、中堅自動車メーカーの御曹司なのに、なぜか警察官になった風祭警部。ボンボン気質の上司にイライラさせられることも多い麗子だけど、実は彼女も正真正銘のお嬢様なのだった。そんなふたりが様々なシチュエーションの殺人事件に挑むのだが、事件の真相を暴くのは、麗子でも、ボンボンの上司でもなく、麗子の執事　影山なのであった。

「お嬢様の目は節穴でございますか」、「失礼ながらお嬢様、やはりしばらくの間、引っ込んでいてくださいますか」など、謎解きとともに影山が麗子に浴びせる容赦ない一言も楽しみのひとつです。